

シンポジウム「流域から都市・地域環境の再生を考える」

(財)リバーフロント整備センター 水辺・まちづくりグループ 森川 陽一
(ワークショップ「自然と共生した流域圏・都市の再生」実行委員会 事務局)

1. はじめに

科学技術基本法に基づく第二期科学技術基本計画に「自然共生型流域圏・都市再生イニシアチブ」が位置付けられたのを機に、「自然環境と共生し都市を再生していくためには流域の視点が重要である」という認識・趣旨に賛同する研究者が集まり、ワークショップ「自然と共生した流域圏・都市の再生」実行委員会が組織され、各研究者相互の情報交換や様々な分野の方々との取り組み等の共有化を図る活動(ワークショップ)を行ってきました。

人口減少・少子高齢化、過疎、都市の衰退、農林業の衰退、食料問題(食の安全・食料自給率)等の日本が抱える問題、地球温暖化、生物多様性等のグローバルな問題を解決する糸口として、「流域圏の視点」が今後ますます重要になってくると考えられます。

そこで、実行委員会では、今後の流域圏研究の方向性、幅広い視野と多様な主体の参画による新たな流域圏での取り組みについて皆さんと一っしょに考え、行動に移していくため、平成22年12月7日(火)に、科学技術館サイエンスホールにて『シンポジウム「流域から都市・地域環境の再生を考える」』を開催しました。

【プログラム】	
1. 開会 (13:00)	
2. 主催者あいさつ (13:05~13:15)	ワークショップ「自然と共生した流域圏・都市の再生実行委員会」委員長 丹保 恵仁 氏
3. 基調講演 (13:15~14:15)	「現代人と流域思考について」 東京大学 名誉教授 養老 孟司 氏
4. 流域圏での実践的な取り組み事例 (14:15~15:15)	「統合的湖沼流域管理 (ILBM) からみた琵琶湖・淀川水系」 滋賀大学 環境総合研究センター 特任教授 中村 正久 氏
~~~~~ 休憩 (15:15~15:30) ~~~~~	
5. パネルディスカッション (15:30~17:15)	テーマ「流域から都市・地域環境の再生を考える」
	コーディネーター 竹村 公太郎 氏 (財)リバーフロント整備センター理事長
	パネリスト 岸 由二 氏 (慶應義塾大学教授)
	崎田 裕子 氏 (ジャーナリスト、環境カウンセラー)
	砂田 憲吾 氏 (山梨大学大学院教授)
	清野 聡子 氏 (九州大学大学院准教授)
6. 閉会 (17:15)	【五十名限】

## 2. 開催結果

シンポジウムの参加者は230名となり、行政、研究者、民間企業、NPO、学生など様々な分野の方、様々な年代の方にお越しいただきました。

まず、「現代人と流域思考について」と題する東京大学名誉教授の養老孟司先生の基調講演では、豊富な知識と経験を交えながら、流域に関わる大変興味深いお話をいただきました。



養老孟司先生の基調講演

次に、流域圏での実践的な取り組み事例として、「統合的湖沼流域管理 (ILBM) からみた琵琶湖・淀川水系」と題する滋賀大学の中村正久先生の講演では、琵琶湖・淀川水系における流域問題の変遷、問題解決のための統合的な制度・仕組みの必要性について、世界の湖沼流域の事例も交えながらお話いただきました。湖沼だけでなく、末端流域にある湿地、ため池、ダム等を含む静水 (Lentic Water) の視点から流域・水資源の管理を分析する重要性が示唆されました。

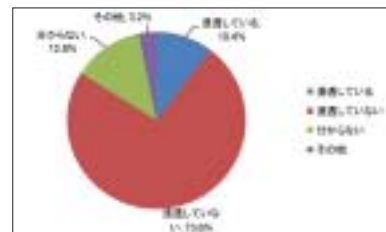
パネルディスカッションでは、「流域から都市・地域環境の再生を考える」をテーマとし、会場も含め活発な議論が行われました。流域圏での取り組みを自治体間で連携しながら、確実に継続させていくためには、担保となる法制度化が必要であること、流域論を普遍化、抽象化し、次の世代に伝える教育が必要であることが示唆されました。



パネルディスカッション

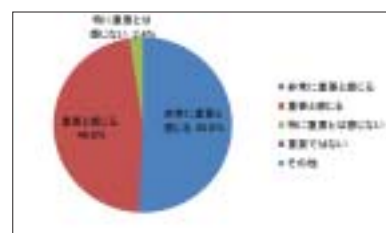
なお、当日実施したアンケートでは、「流域」、「流域圏」という概念が世の中に浸透していないと回答した人が7割以上となった一方、日本が抱える様々な問題に対して「流域の視点」が重要と感じている人は、回答者の97%を越えました。今後も、流域をテーマとしたシンポジウム等の情報発信の必要性を強く感じました。

問:「流域」「流域圏」という概念、考え方が世の中に浸透していると感じますか。



アンケート結果 (その1)

問:日本が抱える様々な問題に対して、「流域の視点」が重要と感じますか。



アンケート結果 (その2)